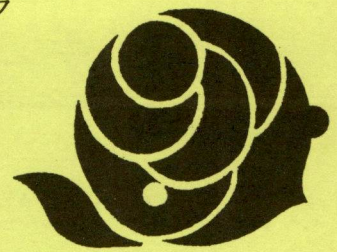


Rosa Plumula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター №. 3

ローザ・プルムラも第3号。そろそろこの「巻頭言」も変わったことを書いても良い頃ではないか。ということで小話の一つ。

ある男が夜道を歩いていると、向こうの街灯の下で地面に這いつくばっている人がある。近寄って、何をしているのかと聞いてみると、鍵を捜していると言う。どの辺に落としたのかと尋ねれば、光の当たらない方を指さして、向こうの方だと答える。そして付け加えて答えるに、向こうは暗くて捜しようがないので、代わりにここを捜しているのだと言う。

これは、経済学の世界ではしばしば聞く小話。もっとも、僕がはじめてこの小話を耳にしたのは、朝永振一郎氏が物理学の現状について述べていたというもの。したがって、他の学問分野でも馴染みの小話かも知れないが、この小話は経済学の現状についてこそ良く似合う。——それでも、ここ数年、経済学の世界でも、これまで“手探り”でやっていた領域に新たな理論の“光”が届くような、大きな理論変革が生じつつあることを、急いで付け加えておこう。

この第3号では、11月27日に開催された《教養教育の授業に関するシンポジウム》について掲載しました。個々の講義の質の充実へむけた議論と努力が活発となることが期待されます。
(有泉)

「試験だぞ！」

改まった気持ちで試験に臨む法

かつて師走には、各家庭で大掃除や障子の張り替えをしたものだ。改まった雰囲気です正月を迎えるためであった。しかし、電気掃除機とガラス戸・カーテンの生活になり、日頃から掃除が行き届くので“煤払い”の習慣はすたれた。それと同時に、年末・年始は一連の休日と化し、新年を迎える改まった雰囲気に乏しくなったのは残念だ。生活の節目は大切にしたいものだ。本学には、年末の大掃除や御用納め・御用始め行事が残っているが、事務職員を中心としたものであり、しかも冬季休業中のことなので、学生諸君には縁がない。

学生生活の節目は、何ととっても定期試験であろう。今年度は、2月初旬に実施される。そこで、少し早いですが、節目を大切に、改まった気持ちで定期試験を迎

える準備をしてはどうだろうか。たまったレポートの類は早めに提出しよう。折り畳んだままノートに挟み込んである配付資料は拡げて整理しよう。教科書や参考書は、埃を払って一気に読んでみよう。日頃こまめに“掃除”する習慣に乏しい者ほど効果覷面、改まった気持ちで試験に臨めること請け合いである。

教養科目には再試験の制度はなく、必修科目で不合格になれば次の年度に再履修することになる。風邪や腹痛あるいは事故・家庭の都合などで試験を受けられなかった場合には、担当教官に連絡するとともに、追試験の手続きをとることが肝要だ。試験の前に「教養科目履修案内」の該当部分(P26)をもう一度読み直しておくことを勧めたい。

(朝 野)

手ごたえのある授業をめざして

「教養教育の授業に関するシンポジウム」開催される

11月27日に水戸キャンパスの茨苑会館を会場に、「第1回教養教育の授業に関するシンポジウム」が開催されました。皆さんもご存知のように、本年度から新しい体制で茨城大学の教養教育がスタートしました。しかし体制こそ変わったものの、教養教育の量と質については、改善すべき点がたくさん残されています。教養教育をより良いものにしていくためには、現状の問題点や望ましい教育のあり方について、公開の場で自由に意見を交わし理解を深めることが大切です。今回のシンポジウムでは、特に総合科目と外国語科目の教育方法をテーマに議論をおこないました。また京都大学の高等教育教授システム開発センターの田中毎実教授をお招きして、「学生を引き付ける授業法」という魅力的なテーマについて、ご講演いただきました。

議論の内容をかいつまんで紹介しましょう。松井先生によれば、「21世紀シリーズ」など、面白そうな授業が来年度も総合科目には目白押しです。大嶋先生の熱意あふれる授業に触れられる学生諸君は幸せです（人気が高すぎて受講できない可能性も大）。京都大学

の田中先生の紹介された「公開授業」は、大学の授業改革の切札かもしれません。ビデオ撮影されながらの授業は「冷汗」ものだそうですが、受講する学生の中には、撮影中に内職や居眠りをするツワモノがいるとのこと。でも授業改革のネットワークは、着実に広がりつつあると感じました。岸本先生の提案された技術習得を重視した英語教育は、学生の熱意に必ず応えてくれるはずです。伏見先生の「内容のない会話では議論は続かない」という言葉には全く同感です。金本先生による日本人と留学生の混成授業の成果を聞き、異文化理解のための外国語教育の重要性を再認識しました。なお今回のシンポジウムの内容は、出版物として刊行されることになっています。

シンポジウムでは、講師の方々の教育に対する熱意をひしひしと感じました。それが呼び水となったのでしょう。シンポジウム参加者との議論も、かつてないほど盛んでした。自分の十数年前を思い出し、学生諸君にちょっと羨ましさを感じました。

（工学部 乾）



キャンパス情報

教育学部から

忙しい年度末になりますが、風邪などひかず締めくくりの期間を充実させて下さい。各コースの卒業行事には1年生から参加できます。日程の連絡は有りましたか？まだなら上級生に聞いて下さい。事前に要旨が印刷されたり、発表用のポスターが準備されたりして分かり易くと計画されていますので、卒研発表・修論発表は見落とさないように。

これらの発表会など卒業に関する行事は2月から（早いところは今月から）ですが、その先の4月から多忙な2年生の授業について書いてみます。

教育学部には異なるカリキュラムが15種のコースごとに編成されています。核となる授業を中心に選択科目で多様化を図っており、各コースの科目が週22

の時間帯に詰め込まれている訳です。来年3年生での教育実習を控えそれ以前に履修を期待されている科目（小学校8教科の教育法・内容研究等）、専門科目、そして教養科目、その結果、最も過密な履修スケジュールが2年生に課されています。教職に関する科目は全面的に履修指定制を取り入れ履修時間帯の確保を計ったので、教養以外の午前中の時間帯はすべて埋まっています（毎日8時50分には教室）。そして各コースの専門科目は5講時まで組まれています。

2年生での履修は別の機会に書くとして、多忙な2年生に1年生の科目を持ち込むことの無いよう、期末までの期間を大切に過ごして下さい。

（山本）

理学部から

新年おめでとうございます。後学期もあっという間に終盤、寒さに気をつけてあと一踏ん張りされるようお願いしておきます。

分野別科目の自然については、クラス分けや授業についての満足度がやや低かった基本調査の結果でしたが、その理由の一つは、教養系授業は初めてとか久々という先生方も多かったことにあるのではないかと思います。詳しい結果を見ないと分からないところが多いのですが、みなさんの声は今後に来る限り生かしたいと思います。以上は分野別科目の自然のコーディネーターとしての理学部からですが、以下は理学部の学生諸君向けです。

1年生でもかなりの数の教養科目、理学部共通科目

を履修し、遅い人でもそろそろ自分のやりたいことが見えはじめた時期ではないでしょうか。成績が良いのがその人に向いた分野とは必ずしも言えず、特に実験系学問には「好きが一番」という面もあります。研究室の実地見学（歓迎されると思います）などもされ、自分が将来やりたいことのイメージを持って、来期以降の上手な履修計画を立てて欲しいものです。手を広げすぎないこと、この点ではひけをとらないという分野を持つことなどは大事なことでないでしょうか。なお、教える側としては、実験は講義のように全面的には受講希望を受け入れることは不可能であり、負担も大きいのです。特に慎重な履修をお願いします。

（川田）

工 学 部 か ら

パソコンに触れてみよう

平成8年度から、教養科目として情報関連科目を1科目履修することになっている。そのための演習室が水戸キャンパスに作られていて、既に利用している諸君も多いことでしょう。情報処理センターの端末室も機種交換で Windows95 仕様のパソコンを端末とした使い易いものになるはずである。

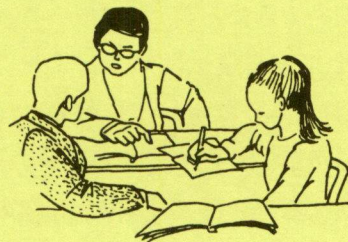
コンピュータ教育では、数学と同様、能力差が非常に大きい。パソコンマニアみたいな学生がしたり顔で闊歩している傍らで、パソコンから1メートルでも離れていたいと思っている人たちもいて、始めの一步が踏み出せないで苦労している。

以前の勤め先での経験と最近の就職担当などをした経験から判断して、今、職業人としてフレッシュマンに要求されるのは、込み入ったことを体系づけて考え

られる能力でしょう。技術面では、1に情報処理、2に英会話、3に一般教養、4に専門知識ではないかと思っている。

まず、苦手な人は、自由にいじれるパソコンを確保して、まず起動し、キーインできるようになろう。そして、あちこちパチパチいじってみよう。運転免許をとるのと違って、マイペースでできる、怖いインストラクターはいない、なによりも下手でも事故につながらない。

(石 黒)



農 学 部 か ら

農学部のカンパスも、すっかり初冬の景色となりました。皆さんもそろそろ阿見キャンパスでの生活に関心を持ち始めていることでしょう。この時期になると4年生や大学院生は卒業論文や修士論文のまとめで忙しい毎日をおくっています。3月末から4月はじめにかけて、多くの学会が開かれます。学会で発表を予定している大学院生や進学予定の4年生は忙しさとプレッシャーでピリピリしています。この時期は論文作成やスライド作成（今やパソコンから直接フィルムに出力できます）のために各研究室のパソコンは大繁盛です。当然のことながら、それをみる教官も大忙しです。3年生は卒業論文をどこの研究室で行うかを決める時期にな

り、将来の進路を具体的に考え始める時期でもあります。後学期試験さえ終われば、2年生が一番のんびり出来るのかもしれませんが（私たちが忙しいとの反論がでそうですが）。

阿見キャンパスでは来年度、情報関連科目、主題別ゼミナールのほかに、総合科目が4本開講されます。2年次に2科目の総合科目の履修が可能です。

(白 井)



教養教育って何なの

遠藤 聡（教育学部，1年）

茨大の教養教育は私自身，実に個性的で興味をひかれるものだと思います。そもそも教養教育とはこれから社会へ飛び立つために，それにふさわしい教養や知識を身につけるための場と言って良いでしょう。社会へ出ると，より幅広い視野で物事を見ることが要求されることになるでしょう。茨大の教養教育はこのような社会の要求に即対応できる，という点で大変優れています。

その特色としては，第一に人文・社会・自然の分野別の科目ばかりでなく，その三つを融合したような科目や，市長や県知事，農業従事者，またこれは新聞にも取り上げられましたが，一家を担う主婦が講師として教壇に立つなど，社会的，個性的で興味深い科目が豊富なこと，第二に上記と関連して，科目選択の幅が大変広いこと，第三に，「講義」という堅苦しい感じがなく，ある程度肩の荷を下ろしてアットホームな雰囲気の中で受講できる科目も比較的多いことなどがあげられます。

教養教育は社会において物事を柔軟性をもって考える力を養うことに結びつくものであるとも考えられます。その点においても，茨大の教養教育は学生達に個性的，独創的な思考を働きかけるものにもなっているのではないのでしょうか。

瀬尾美智子（理学部，1年）

教養科目講義に関して意見や要望を，ということですので，私の至極個人的な考えを少々述べさせていただきます。

私自身の事で恐縮ですが，今現在の私は将来やってみたい事がただ漠然と見えてはいます。しかし，その内容に関わってみたいと思っているに過ぎず，どう関わるかはまるで見当が付きません。おそらく，「研究する」ことになるのですが，その前に研究するとはどういうことかを知りたいのです。自分で見つけていくものなのかもしれませんが，きっかけやヒントが

欲しいのです。関連する講義も少しありますが，研究内容だけではなく，どのようにしてそのテーマに興味を持ち，研究するようになったのか，どうやって研究しているのかのプロセスや方法を聞いてみたいです。

私はまだ20年程しか過ごしていない未熟者です。人生の上での先輩に話を伺う機会はありません。学生である私には，多くの教官に上記のようなことを話していただければ，精神面や思想面などでも十分プラスになり，大学生の間だけではなく，その先も役立つことになると思います。このような機会を専門課程に進む前に，教養科目として組んで欲しいです。

山田峰人（農学部，1年）

新しい「大学」という学校に入り，既に半年が経過した。入学当初は，高校までの授業との余りのギャップに，正直とまどいを感じた。今までの，あれこれと指定される「与えられた」授業から，自分で決め，そして実行する「自ら学ぶ」授業へと変わったためである。

最初の決断は時間割の作成である。選択できる授業に幅があるとはいえ，高校までに比べ，余りの多さに，茫然としてしまった。それに輪をかけてくれたのが，講義概要の分かりにくさ，である。これから半期，その授業を受けねばならないのだから，面白く，興味深い授業の方が良いに決まっている。そのための選択の一助となるべきこれが，あまり役に立っていなかったのである。

そして実際に授業を受け，「自ら学ぶ意志」の重要性を痛感した。特に人文の授業に於いて，その意識は強まった。与えられた課題に関して，答えを導いていくのだが，その答えが，一定ではないのだ。だから良い答えを探すために，考えたり，話しあったりしてはならなかった。もちろん，一方的に講師が喋るだけの授業もあったが，これは，その事柄を理解するために，本から学ぶ必要があった。

私にとって教養教育とは「自ら学ぶ意志」の養成のための授業であるといえる。

V o i c e

試験なら任せておけ

清水裕美（人文学部，2年）

「まあどうにかなるだろう」と高を括っていたテストが、問題の意味さえ分からない…こんなとき、あなたならどうしますか？それでもどうしても単位が欲しいという人のために、ある方法をお教えしましょう。

答えが分からないのだから、答案用紙に書けるのは自分で考えたこと、思いついたことくらいしかありません。では具体的に何を書くのか。

1. 授業中に先生が話していたことに対する自分の考え。（授業内容に関係したことを覚えてなかったら、先生の雑談を用いる。）2. 先生に関すること。（字がきれい、聞きとりやすい、服のセンスが良いなど。短所があれば、長所と一緒に書いてもよい。）3. 授業内容への要望。（〇〇についてもっと詳しくやって欲しいなど。）こんなことをなんとか知恵を絞って書いていくのです。ただ、この方法には欠点がある。ある先生はCをくれるかもしれないけれど、他の先生にはとことん嫌われてしまうかもしれないということです。簡単に言えば、この方法は丁か半かの賭けなのです。

尚、これは先輩から聞いて私が知っているというだけのことであって、いままで実行したこともなければこの先実行する気も毛頭ありません。私は真面目ですから。もしも実行した人がいたら教えて下さい。うまくいったらお礼をもらわないと。でも失敗しても私のせいじゃありませんよ、念のため。

馬場雄一郎（工学部，2年）

教養科目はまず科目選びが大事である。少なくとも自分に興味のないものは選んでも意味がない、取りたいなと思うものは効率よく取ろう、授業においては出席するのはいうまでもなからう、出席を取らない授業を「出てもでなくとも同じ」と思ってさぼっているとそれが癖になって他の授業にも影響が出てくる、さぼりグセから抜け出るのはとても難しい、はまらないよう注意すべきである。

授業に出たらノートはできるだけ取ろう。何をやっているかわからなくともノートしておけばテスト前など、後々必ず役に立つ。筆者は昨年ノートをとらずに大変苦労した記憶がある。また、テストについてであるが、公式のまる覚えはまったく意味がない。問題の傾向、解き方をおさえておくことである。よってテスト前に必ず練習問題を解いておこう。

後は友人である。なるべく賢い友人を多く持つことがテストに大きく左右する、友人は大いに活用しよう。

さて、毎日学問ばかりしては楽しい学生生活とはいえない、「パソコンが僕の唯一の友人です。」といった人間になってしまっただけはいくら勉強ができてもしかたない、サークルやボランティアなどに参加して大きな人間になろう、楽しく過ごし大学を四年で卒業できるよう頑張るべし。

掲 示 板 コ ー ナ ー

企 画 室 だ よ り

◎掲示を見よう

みなさん、われらの学園等をよく読んでおこう。みなさんが大学生活をおくる上で必要な一般的な諸手続きについては、入学した時に配布された「われらの学園」で紹介しています。また「教養科目履修案内」のなかでは大学生活の初期段階でのいろいろな注意と手続きについて紹介しています。

学生として“勉強”も大切ですが、知らなくて自分が損をするようなこともあるので決められた手続期間を守ってください。

まず“登校したら共通教育棟2号館前の掲示を見る習慣をつけましょう。”

平成9年度前学期分の授業料免除申請願書の配布期間は平成9年1月中旬になる予定ですので注意してください。

●キャンパス内の交通ルールを守ろう

水戸地区においては、交通規制が設けられていて構内への車両の入構は、許可された者以外は、原則として入構は認められていないことは、皆さんご承知のことと思います。

バイクについての交通規制は、ご承知ですか？

バイクについては、申請された者にはすべて入構証（ステッカー）が交付されバイクに添付することになっています。学園内の騒音を無くすため下記の事項を守りましょう。

記

1. バイクでの登下校は南第二通用門（茨苑会館）から出入りし、正門および西門（講堂裏）からの出入りはできません。
2. バイクは、定められた場所（茨苑会館の前と脇）に置き、そこから先のキャンパス内には乗り入れないこと（押し歩きも不可）。

自 転 車 に つ い て

自転車は大変便利ですね、どこへでも駐輪でき、どこへもすぐ移動できます。

学内における駐輪場が少ないこともありますが、皆さんの心がけ次第ではもっと整然とした学園環境が作れるのではないのでしょうか？もし万が一学内での交通事故、火災が発生し、救急車・消防自動車が入構できないような事態ができてからでは遅過ぎます、下記のことには注意をして不測の事態に備えましょう。

記

1. 学内の移動には自転車を使わないよう
(健康増進のためにも二本の足を使おう)
2. 福祉センター前の路上に駐輪しないよう

読んだ。思った ローザ・ブルムラ

標題の「薔薇に若芽」から「薔薇の蕾」を連想して、市民ケーンを思い出し、オーソン・ウェルズの顔が、そして第三の男の音楽が聞こえてきます。第2次大戦後の混乱した時代から新しい社会を目指した当時と同様に21世紀に活躍する学生諸君の「行動指針」の参考になればとの大学教育研究開発センターの熱意が感じられます。

このすばらしい標題のRosa Plumura 1号、2号にはセンターが学生諸君に期待する事、学生諸君がセンターに期待する事が記述されていました。センターが学生諸君に期待しているのは、何かを見つけて欲しいという事でしょう。何かを見つける事と同様に大事な事は「子供の月の発見」に注意する事ではないのでしょうか。子供の月の発見とは「子供にとっては最初の発見でも歴史的にみればすでに発見されている事」の喩えです。そのきっかけが一連の講義と思います。

平成8年度は新しいシステムの初年度であり、また大学が水戸、日立、阿見と3個所に分散しているため、教室の数や担当教官の専門分野のアンバランスなどから十分なクラス編成が出来ていない事も事実かとおもいます。学生諸君には勉強は在学中ばかりでなく、生涯にわたってするもので1年次の気持ちをこれからさきも持ち続けて欲しいと思います。同様にセンターには今後ともたゆまぬ努力を期待します。

梶 谷 修 一（工学部、教授）

『Rosa Plumura』が刊行されて3号目を迎える。以前、大学教育研究開発センターを取材させて頂いた縁で感想を寄せることになった。

まず、「教養教育に関する基本調査（I）」の集計結果なるものが第2号に掲載された時私は単純に驚いた。大学はお役所同様、公開するという行為から程遠いところだと思っていたからだ。不満の声も隠すことなく報告したのは評価できる。学生の意見が反映されない構造自体妙だが、国レベルでも国民の声は常に無視されると言われる位だ。それ故この様な調査が実施、なおかつ公表されただけで驚き、感心したのだ。

しかし時間の経過と共に、掲載の意図が明確でない点が気になってきた。センターは結果を公表することで何を目標しているのか。尋ねれば、なるべく意見を反映させる様に検討したい等の返答がくるだろう。頻繁に使われる台詞だが、どういう風にとという具体的な面はいつだって示されない。

ただ、このニュースレターが発行されてようやく3号。これだけで判断するのはいささか性急だ。また学生側もこれを機に、どんどん意見を言うべきだと思う。今回、調査の速報掲載にしか触れられなかったが、このようなニュースレターが刊行されたことに、大学が変わって行けるのではないかとの希望が持てた。センターの独り善がりにならないことを期待して、これからどう活動していくのかに注目したい。

田中真由美（人文学部、1年）

科目選択今後の問題点

前学期は分野別科目と総合科目の選択に当たって学生の皆さんには大変ご迷惑をかけました。

そこで、後学期の受講については、学生の皆さんの協力を得て、7月に予備登録を行いました。その結果にもとづいて、教室定員をオーバーする登録者のあったクラスは希望者が全員受講できるように収容能力の大きい教室へと変更しましたが、それでもなお定員を大きくオーバーするクラス（表1参照）が残りました。これらのクラスについては、乱数による抽選をおこなったわけです。

表1 登録で定員オーバーしたクラス

科 目	コード	定 員	登録数	受講数
人 文	1287	91	122	86
	1325	70	100	68
	1326	40	100	48
	1226	166	220	166
	1227	196	246	187
社 会	1468	196	313	187
自 然	1585	91	180	85
	1586	166	297	162
	1549	152	202	141
	1606	140	202	136
総 合	1769	140	365	131
	1723	196	608	220

後学期開始時に予備登録の結果の一覧表を皆さんに渡し、それを参考にして抽選もれの方は別のクラスを受講していただくというご苦勞をかけました。おかげで前学期に比較するとずいぶん混乱が少なかったのですが、希望する授業を受講できないという問題は依然として解決されていません。いかなるシステムを採用すればよいのか、今後の課題として残りました。

定員をオーバーしたクラスにおける現在の受講者数は、表1右端の列のとおりです。ほぼ満杯の状態で授業が行われています。教室定員の80%くらいの受講者数が適正規模といえるのでしょうから、これは過密状態です。このほかにも、過密状態のクラスが存在しています。各学部から出講する授業本数の増加が期待されています。

前学期総合科目で単位修得できなかった学生数は、のべ410名にも達しました。希望する授業を履修できなかったことも、学修意欲を喪失させた原因でしょうが、もっと意欲的に学修してほしいとみなさんをお願いしないわけにはいきません。前後学期を通じて0～2単位しか総合科目の単位を修得できなかった方のために、1～2科目の総合科目を後学期終了後、集中講義として開講いたします。該当する方は教養教育第一係でご相談ください。

(谷 口)

つ ぶ や き

ニュースレター「ローザ・プルムラ」も第3号となり、企画・原稿集め・割付・校正に至るまで編集も軌道に乗ってまいりました。しかし、第1号でつぶやきました①読み易い、②読んでおもしろい、③役に立つ情報も含まれている、なる編集方針がどこまで実現できたのか。今号では「読んだ。思った。ローザ・プルムラ」を二人の方にお寄せ頂きました。燃え上がるような薔薇の若芽に育つよう、これからも読者諸賢の誌上への参加をお願いいたします。(H.O.)

発 行 日 平成9年1月
発 行 者 茨城大学
大学教育研究開発センター
水戸市文京2-1-1
029(228)8416〔企画室教養教育第二係〕